

田中家通信



株式会社 田中家石材

VOL. 14

発行/株式会社 田中家石材
住所/彦根市高宮町1-08-1
電話/0749(33)5000

HP: <http://www.tanakaya-sekizai.com/>
Mail: info@tanakaya-sekizai.com

田中家通信編集部よりお知らせ

高宮町蝸牛会

かぎゅうかい

高宮町蝸牛会は、皆様に高宮町の町並みを歩いていただき、高宮の風と空気を肌で感じていただきたいという思いで活動しております。6月14日・15日は高宮地域文化センターと徳性寺に来ていただき気軽に作品を鑑賞して下さい。(アート展)

又、テント生地作家さんや学生・生徒・園児の皆さんに絵や書を描いていただきました。今年は「びわ湖 生命(いのち)の水」をテーマに、芸術を超えて環境ということを考えて描いていただきました。7月20日まで高宮小学校フェンスに展示しております。(テント展)



田中家石材も参加・応援致しております。

日本の粹な文化

◆神様が宿る神聖なホ・ウ・キ

箒(ほうき)は千年以上経つにもかかわらず、ほとんど形も変えず掃き掃除には欠かせない道具として現在でも使われています。箒は古くから神聖なものとして考えられ、箒神(はきがみ)という神様が宿るといわれています。

箒神とは、産神(うぶがみ)(出産に関する神)の一つで、「掃く」、「掃き出す」という行為が産と結びつき、妊婦のおなかを新しい箒でなでると安産になるといわれたり、玄関に逆さに箒を立てることで、長居の客を帰す(家から掃き出す)というおまじないもあります。

また神聖なものですから、またごと罰が当たるといふ言い伝えもあり神秘的な道具なのです。



生前墓(逆修塔)と聖徳太子

聖徳太子は、生前から死後葬られるべき墳墓(磯長陵)をあらかじめ構造して置きました。これは横穴式円墳で、生前このような墓に入って一旦死んだことのように葬式をするのが生前墓(逆修塔)の古い形と思われる。

現在でも、火葬場が新設されると、開会時に新しい未使用の火葬釜に入ってしまった行為は、一旦死んだことになって再生すると、過去の禍(わざわい)を断つて、後に健康で長生きし、人の世話にならず安楽に極楽往生できるという思いが根底にあり、これを「逆修」といいます。

浄土真宗の「帰敬式(おかみそり)」、「浄土宗の「五重相伝」、真言宗の「結縁灌頂」、融通念仏宗の「伝法」も逆修で、いずれも一旦死んだことを示す法名や戒名、血脈をうけ、それは阿弥陀如来または大日如来から自分までの法系図であり、極楽への約束手形となります。

善光寺(長野)の「戒壇めぐり」も一旦死んで地獄、極楽をめぐるって再生するということです。

この信仰は日本人の滅罪信仰からたもので、一旦死ねば罪がほろび、不幸の源は断たれるから、健康と幸福が得られるという論理であります。

つまりこれらのことは、「死や「お墓」に対する日本人の考え方は「こわい・きたくない・たたる」という「マイナス要素」より、それを取り除いた新たな生(再生)や生きている人の「長寿・健康・幸福・滅罪」といった「プラス要素」へ積極的につなげようとする考え方があったと思われまます。

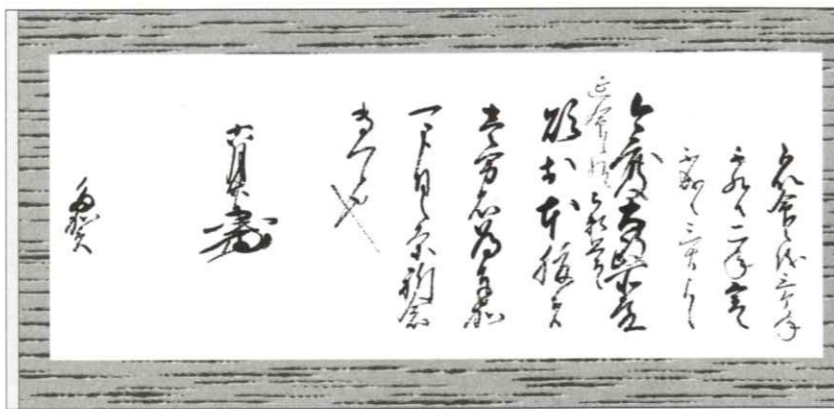
親への孝心 太閤秀吉とお多賀さん

多賀大社は古くから寿命長久・縁むすびの「お多賀さん」と親しまれて、朝廷をはじめ武家や民衆の信仰が厚く、その歴史には広がり深まりがあります。

戦国大名の中でも、とくに豊臣秀吉とお多賀さんとの関係は有名です。天正十六年(一五八八)、秀吉は母大政所の病気に際して、多賀大社に米一万石を寄進してその平癒を祈願しています。

その書状には「母親の存命を三力年、それが無理なら二年、それも無理なら三十日でもよろしいから、なんとしてでも延命される様に」と切実な祈願文を寄せており、秀吉の母への孝心のほどがうかがわれます。その後大政所は回復なされ五年の寿命をえられたということです。

太閤秀吉祈願文



尚以命之儀三力年
不然者二年實々
不成者三十日にて
今度大政所殿
延命候様二被頼思召候
煩於本復者
壹萬石為奉加
可申付候條祈念
專一候也
六月廿日花押
多賀

我が家の家紋

◆沢瀉紋(おもだかもん)

オモダカは池や沢などに自生する水草で愛らしい花が咲きます。その昔、この植物は葉の形が矢ジりに似ていて、また沢瀉威の鎧ということばもあって、「攻めても守つてもよい」ということから「勝ち草」と呼ばれていました。

戦いに勝つことにかけていた戦国武将の間ではよく使用されていたようです。

主に戦国武将では、豊臣秀次、福島正則、毛利元就、大名では土井、奥平、堀、木下、酒井の諸氏が使用しました。ことに木下氏は豊臣氏を受け継ぐ血統で「沢瀉紋」を代表紋としていたようです。

◆柏紋(かしわもん)

古代では柏の葉に馳走を盛つて神に捧げていました。これに由来して柏が「神聖な木」と見られるようになったようです。

柏手を打つことは神意を呼び覚ますことをいいます。柏は神社や神家と切つても切れない縁があります。柏紋を最初に使ったのは、神社に仕えた神官だったようで、公家でも神道を司った卜部氏が用いました。

現在、柏を神紋としている神社は各県に一社はあるといわれています。

代表的なのは、土佐山内氏と譜代の牧野氏で、牧野氏は槇野とも称しますが、槇とは神聖な木を指し、柏のことであるといわれています。伊勢の久志本氏は皇大神宮に奉仕し、尾張の千秋氏は熱田大宮司として奉仕をしました。



(沢瀉紋の一例) 丸に立ち沢瀉



(柏紋の一例) 丸に三つ柏

参考文献『多賀信仰』
『多賀大社由緒略記』より抜粋